

蒼葉

裾野市立深良中学校だより

平成 25 年 12 月 6 日(金)

第 28 号

発行人 校長 鈴木史良

ドバイにおける学校評価

— 世界の観点から学校の評価のあり方を考える —

静岡県の子どもたちの学力を伸ばすため、県教委作成のリーフレットを2、3年生に配付しました。全国と県の正答率等を比較し、学校や家庭での学習についてかなり具体的なアドバイスが記載されています。両者の連携が大切なことがわかります。

ところで世界の教育界では、市民の税金で運営されている公立学校の指導実績を納税者に公表するアカウントビリティーの考え方が主流です。英国ロンドンでは11～12歳で受験する全国統一テスト（GCSE）の学校別平均点の公表がすでに1995年から始まっており、その結果は新聞発表され、保護者・子どもが学校選択する時に必要な情報のひとつとなっています。

アラブ首長国連邦ドバイでは、2008年から学校の自己評価機能を高め、教育の質を確保していこうとする動きが始まりました。まず、教育当局が小中学校長を招集し、すべての学校を対象とした学校視察の実施を通達、それに向けて説明会を行いました。これは行政が各学校の客観的な評価を行って学校改善を促し、その学校のもつ教育力を高めることをねらいとしています。

こうして学校視察が始まり、2009年度は1月18日から20日までの3日間実施されました。この時は日本人会との合同大運動会直前の多忙な時期と重なり、事前に求められた提出書類の準備に苦労しました。

①School Profile、②09アクションプラン、③学校改善計画、④学校教育の質の向上についてのレポート、④主要科目の試験結果過去3年分、⑤学校経営グランドデザイン、⑥教職員リスト（年齢、担当教科、仕事内容等）、⑦週時間割表、⑧学校ロケーションマップ&校舎配置図、⑨学校要覧、⑩出席状況調査表、⑪教師陣についての詳細、⑫教職員、保護者代表、日本人会代表との面接日程、⑬Lesson Descript（授業案）。他にも保護者が直接教育当局ホームページの質問事項に答えるアンケートも実施されました。

当日午前7時15分に到着したのは、視察団リーダーのマンチェスター大学教授、ピーター・ケイブ氏、アメリカの教育コンサルタント、ヘンリー・モリタ氏、英国の学校視察官、ロブ・アイザック氏、マレーシア在住の英国教育コンサルタント、イアン・カー氏、KHDA係官でアラビア語、イスラム教育を視察するザイード氏の計5名でした。

評価対象項目は、①主要教科（アラビア語、イスラム教義、英語、算数数学、理科）の習得状況、②児童生徒個人及び社会的な発達状況、③教授指導と学びの状況、④児



童生徒の実態とカリキュラムの整合性、⑤児童生徒の支援と保護状況、⑥学校の管理運営とリーダーシップ、⑥学校の総合的なパフォーマンス、の計6項目です。

まずは校長が明治以降の日本の教育の大まかな流れ、日本の教育の目的、海外日本人学校設立の意義、ドバイ日本人学校の特徴などについて説明、その後視察団リーダーのケイブ氏との個別面談がありました。ケイブ氏は昨年視察に来校した調査団の一人で、日本語が話せるので助かりました。他の視察官はそれぞれ担当教科別に授業を参観したり、関係職員との面談をおこなったり、昼休みは昼食をとりながら児童生徒代表と歓談したりと、忙しい中で休む暇もなく、精力的に活動していました。

視察団は3日間の予定を終え、最後に口頭での講評をいただきました。本校の組織や子どもたちの優れた点や強みについて数多く言及し、改善点としてアラビア語の時数が少ないこと、英語の達成度がヨーロッパの国々に比べるとやや劣ること、理科室が狭く設備もよくないこと等があげられました。ドバイ日本人学校は文科省の学習指導要領に

準拠し、国内カリキュラムに加えて小学1年生から中学3年生まで、英会話週2時間、アラビア語1時間の授業を組んでいるため、これ以上アラビア語を増やしたり、イスラム教義の授業を確保したりする余裕はないのが実情です。理科室の施設設備の充実も大きな課題ですが、現地校のすばらしい設備にはかないません。

視察から3か月後、学校長宛に評価結果が掲載されたハンドブックが届きました。ドバイの公私立小中学校約200校が優、良、可、不可の4段階に評価され、他にも新聞やホームページに公表されました。ドバイ日本人学校の総合評価は「良」（全体の34.9%）でした。因みに「優」の学校は4%程度です。学校のもつ強みと弱みが明示され、改善点も指摘されました。さらに同年5月末までに改善策を明確にした「アクションプラン」を当局に提出し、かつ保護者にも公開することが要求されました。

新興国ドバイの戦略は石油依存ではありません。世界の流通をリードする「人づくり」です。そのためには学校教育の質をいかに高めていくか、そのために本気になったドバイ教育当局の“やる気”を強く感じました。このような教育環境で育つドバイの子どもたちは英語とアラビア語を駆使し、世界のビジネスシーンに躍り出ていくでしょう。彼らが世界に羽ばたく20年後、30年後には何らかの結果を出すに違いありません。その時、日本の子どもたちはどうなっているのでしょうか？

ドバイ教育局による学校評価

目的 … 学校視察団の客観的な評価により、学校改善をうながし、それぞれの学校のもつ教育力を高める

評価対象項目(2009年)

1 主要教科(アラビア語、イスラム教義、英語、数学、理科)における児童生徒の進歩状況	良
2 児童生徒個人の人間性及び社会的な発達状況	良
3 教師の教授指導と児童生徒の学習状況	優
4 児童生徒の実態とカリキュラムの整合性	良
5 児童生徒の支援と保護状況	優
6 学校の管理運営とリーダーシップ	優
7 学校の総合的なパフォーマンス	良